

学校教育目標 「夢や志を抱き、未来を主体的に切り拓ける逞しい生徒の育成」

～ *Think and Share, even more, be Ambitious!* ～

「大切な人に、素直に感謝の思いを伝え合う！」

いよいよ今回で最終回です。最後に、みなさんに馴染みのある童話、新美南吉の『ごんぎつね』の一部を紹介します。私自身、小学校の校長時代において、この本を児童に読み聞かせをし、児童は目を丸くして真剣に聞いていたことが思い出されます。みなさんも小学校の3・4年生の時にこの本に触れる機会があったのではないのでしょうか。この童話は、とてもわかりやすく心揺さぶられるストーリーですが、主人公であるぎつねのごんと兵十（ひょうじゅう）の心の動きや何気ない行動を通して、人生の深い知恵を読み取ることができます。ごんは、生きる逞しさがあがり、頭もよくて寂しさを自分で紛らわせることもでき、一方で、子どもっぽいやんちゃな面を併せもっています。そんな姿が描かれています。この話の最後は、裏口からこっそり家の中に入ったごんが兵十に見つかり、火縄銃で撃たれてしまう場面です。

そして足音をしのばせてちかよって、今戸口をでようとするごんを、ドンと、うちました。ごんは、ばたりとたおれました。兵十はかけよって来ました。家の中を見ると土間に栗が、かためておいてあるのが目につきました。

「おや。」と兵十はびっくりしてごんに目を落としました。

「ごん、お前だったのか。いつも栗をくれたのは。」

ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。

悲しい結末ですが、兵十はようやくごんの真心に気づき、和解することができました。

この童話を通して、兵十とごんが伝えているのは、完全な善人であることができない人間がその弱さや誤解、葛藤などを乗り越えて相手を思いやる力を発揮していく素晴らしさです。

ごんは自分に銃を向けた兵十に対して恨みを抱くことはなかったと推測できます。兵十にはごんを撃ってしまったことへの後悔の思いが続いたことでしょう。しかし、そこで生まれた友情は兵十への心の種火となって、その後の生きていく力になったに違いありません。

生徒のみなさん、人生には出会いがあって別れがあります。人生の様々なステージでみなが経験することです。別れが近くなると、人生で縁のあった人々への感謝や相手を大切に思う気持ちを表現せずにはいられなくなると思います。あのときあんなことがあった。嫌な思いもしたけど誰かが支えてくれた瞬間があった人もいるでしょう。小さいことであっても相手が自分にしてくれたことを思い出し、感謝する習慣を意識して身につけてほしいものです。知らないうちに心が優しくなり、清められていくことでしょう。その経験が他人（ひと）の心の痛さがわかる人へと成長します。心の中で見えざる存在が生きている人の絆や愛を深めてくれると思います。

「あのとき言えばよかった」ではなく、お互いがまだ顔を合わせているうちに、素直に感謝を伝え合う生活を送ることができたら、素晴らしいことだと思います。ごんが毎日少しずつ栗を運んだように、身近な人たちに自分にできる小さな努力を積み重ねることはその人の人間らしさを増し、豊かな人生へと導いてくれることだと思います。

2年間ご愛読ありがとうございました。「少年よ！大志を抱け！」でますますの成長を祈っています。

※参考文献：新美南吉(1996)「新美南吉童話集」『ごんぎつね』岩波文庫、岩波書店

令和5年2月 旭市立第二中学校校長 加瀬 政美